

「核データ部会」設立を目指して

東京工業大学原子炉工学研究所

井頭 政之

iga@nr.titech.ac.jp

1. はじめに

日本原子力学会に「核データ部会」を設立することが、1月21日に開催されたシグマ委員会運営委員会で承認されました。学会の企画委員会(3月8日)および理事会(3月23日)での検討審議・承認が条件ですが、3月28日(火)～30日(木)の愛媛大学での「春の年会」期間中に設立総会を開催する予定です。日時・場所の詳細は未定ですが、是非、読者の皆様のご出席をお願いいたします。

以下、ここに至るまでの背景、経緯、等について述べますが、お急ぎの方は読み飛ばして下さい。

2. 背景

本ニュースの「シグマ委員会だより」の区切りページに、「シグマ委員会とは、日本原子力学会の「シグマ特別専門委員会」と日本原子力研究所の「シグマ研究委員会」との総称である。正式な名称ではないが両委員会を併せて指すときにしばしば使用される」と書かれており、裏ページに「シグマ委員会の構成」が示されている。現在、120名程度の委員で構成されている。これまでの35年間の活動期間に着実に研究成果をあげ、主要な結果はJENDL-3.2として結実している。また、学会の企画委員会、編集委員会、およびプログラム委員会にシグマ委員会推薦の委員を送り、学会活動にシグマ委員会の意見を反映させてきた。しかし現在、種々の状況が変わってきた。

この120名にもものぼる「大」シグマ委員会に対する原研上層部の最近の考え方、および、それに対するシグマ委員会としての対応に関しては、核データセンターの長谷川氏が本ニュース[No.64(1999)59-66]に解説している。要するに原研上層部は、「委員会をもっと縮小して効率的に活動を行うべし」という意見で、経営者側としては当然の考え方である。

一方現在においては、高エネルギー核データに代表される多種多様な核データのニー

ズがあり、これらに対応するにはこれまで以上にマンパワーが必要である。しかし、上記の理由から委員数の増加は無理であり、また各委員のシグマ活動へ充当できる時間は減少の一途をたどっているように思える。即ち、シグマ委員会のマンパワーの増加は期待できないのが現状である。

近年、学会の口頭発表論文の分類項目変更にともない、核データは第Ⅱ区分（放射線工学と加速器・ビーム科学）と第Ⅲ区分（核分裂工学）とに分けられた。尚、原子核物理は第Ⅱ区分である。その結果、両セッションの時間的重複等の理由から、核データ関係参加者の分散を引き起こし、両セッションともに低調となって来た。大学院生等の若い研究者の最初の発表の場である学会セッションが低調であることは、研究者育成、核データ分野、ひいてはシグマ委員会にとって由々しい問題である。

学会には現在9つの部会（炉物理、核融合工学、核燃料、バックエンド、ヒューマン・マシン・システム研究、熱流動、放射線工学、加速器・ビーム科学、社会・環境）があり、1999年10月22日現在で、1,830名（延べ人数で2,203名）が部会に入会している。学会の正会員と学生会員を合わせると約7,500名なので、会員の約4分の1が既に部会に入会していることになる。学会理事会では現在、学生会員が必ず1つ以上の部会に入会する完全部会制を検討している。

「定款の一部変更に関する活動状況」が学会和文誌 [Vol.41, No.9(1999)975] に掲載されているが、その中で「代議員制度」が重大事項である。現在の定款では、総会の定足数は委任状を含めて「社員」の10分の1以上と定めているが、国の基準および指針では「最低でも社員の過半数」である。現在の定款では、学生会員を除く全会員が「社員」であり、社員の過半数を総会の定足数とすると総会成立は不可能に近い。文部省からの指導は、「会員の中から代議員を選出し、代議員を「社員」とする代議員制度を導入するなどの方法により、総会の定足数は「社員」の過半数以上とする原則を守るように。」である。理事会では、「代議員制度」やむを得ないとの判断で、代議員選出の基盤の整備を検討している。選出基盤としては、地域（支部）、研究分野（部会）、等々が考えられる。上記の完全部会制移行も、この選出基盤の研究分野と深く関わっているものと考えられる。

シグマ特別専門委員会は35年の伝統を持つが、あくまでも専門委員会の1つであり、「ある選定した特定の題目についての調査・研究・討議を行い、これが推進・普及を図る。」（専門委員会規程）を目的としており、「定款第5条の事業を実施するため、各専門分野において部会員相互の情報交換および連絡調整を図るとともに、本学会の活動の一環として当該専門分野に係わる対外活動を行い、学会活動の活性化に資する。」（専門分野別研究部会（部会）規程）を目的としている部会とは階層が異なり、上記の代議員選出基盤の研究分野とはなり得ない。

また前述のように、学会の企画委員会、編集委員会、およびプログラム委員会にシグ

マ委員会推薦の委員をこれまで送り込んできたが、近年、これが難しくなってきた。各委員会委員の所属する部会および機関のバランスが重要視されており、シグマ委員会は一専門委員会としか認知されていないのが原因である。現在、シグマ委員会推薦の企画委員はいない。

シグマ委員会は運営委員会を要として良くまとまり、ワーキング・グループによる活動も活発であるが、委員会の外部からは「敷居が高い」あるいは「閉鎖的である」という声もある。シグマ委員会委員の平均年齢が年々高くなっていることも事実である。更に、企業からの委員から、「シグマ活動を行いにくくなった」という声も聞かれる。

以上述べたことから、シグマ活動環境が悪化しているととらえるのが妥当であり、環境整備の方策を早急に検討することが肝要であると考えた。そこで、核データ部会の設立検討を含む、シグマ活動環境整備方策の検討を行う「シグマ検討小委員会」の設置を、昨年 10 月 7 日に開催されたシグマ運営委員会に提案し、承認された。委員としてはシグマ特別専門委員会主査（吉田正）、シグマ研究委員会委員長（中川正幸）、核データ専門部会部会長（井頭政之：委員長）、炉定数専門部会部会長（山野直樹）、核燃料サイクル専門部会部会長（片倉純一）、核データセンター室長（長谷川明）の 6 名、事務担当として核データセンターから 1 名（中川庸雄）、合計 7 名とした。

3. 検討経緯

以下、シグマ検討小委員会での検討経緯について簡単に述べる。

【第 1 回会合：1999 年 10 月 29 日（金）13:30～17:30】

(1) シグマおよび核データ活動に関連して、

- 1) 現状分析
- 2) 学会の方向性分析
- 3) 対応策の検討
 - a) 核データ部会の設立
 - b) 炉物理部会の下での活動
 - c) シグマ委員会のまま

を行い、議論の結果、「核データ部会設立の可能性」を検討することとした。

(2) 学会の「専門分野別研究部会（部会）規程」、「専門委員会規程」、「専門委員会の区分」、および「各部会の規約」を検討し、「核データ部会設立」に関しての検討事項および「核データ部会」と「シグマ特別専門委員会」との関係について議論した。

(3) 以下の事項について確認した。

- 1) シグマ委員に、核データ部会設立を検討する背景を説明し、意見を求める。
- 2) シグマ委員の意見を集約するためにアンケートを実施する。

- 3) 過去5年間の学会での核データ関連の発表件数および全体に対する割合を調査する。
- 4) 過去5年間の学会欧文誌での核データ関連の発表件数および割合を調査する。
- 5) シグマ委員会の年齢構成、所属構成、地域構成を調査する。
- 6) 電子会議室で議論を重ねる。

【第2回会合：1999年11月26日（金）13:30～17:30】

- (1) 学会理事会における部会制完全移行の動き、および竹田理事（阪大）の要望から、2000年3月末の学会が、「核データ部会設立総会」の絶好の機会であることを確認した。
- (2) JNDCmail で流した「部会設立を検討する背景」に関連して、核データ部会設立に関する反対意見がなかったことが確認された。
- (3) 上の(1)および(2)から、「部会設立」に向けて議論を重ねた。部会名の案を「原子核データ部会」とし、アンケートを行うこととした。
- (4) 部会で行う事業について議論を重ねた。

【第3回会合：1999年12月21日（火）13:30～17:30】

- (1) アンケート結果（別紙1）を分析した結果、「核データ部会」の設立をシグマ運営委員会に提案することを決定した。
- (2) 部会設立に必要な資料（設立趣意書、部会規約、発起人名簿、その他）に関して議論を行った。
- (3) 核データ部会設立に関して、以下のスケジュールを確認した。
 - 1) 1月21日（金）：シグマ運営委員会に提案・承認
 - 2) 3月8日（水）：学会企画委員会に提案・承認
 - 3) 3月23日（木）：学会理事会に提案・承認
 - 4) 3月28日（火）～30日（木）の春の年会のいずれかの日に設立総会開催
 - 5) 部会員募集の記事は4月号あるいは5月号の学会和文誌に掲載

4. 核データ部会、シグマ特別専門委員会、シグマ研究委員会の関係

私見であるが、核データ部会、シグマ特別専門委員会、およびシグマ研究委員会の関係について述べておく。

現在の9部会の規約を検討した結果、「核データ部会」は「核データ・核物理に関する専門I 痺F野の研究活動を支援し、その発展に貢献することを目的」とすることになるであろう。即ち、「目的指向型」の組織ではない。

原研の「シグマ研究委員会」の設置目的は「核データ研究を総合的かつ効率的に推進

するため」(シグマ研究委員会規程) [核データニュース, No.64(1999)65-66] である。設置目的はかなり一般的に書かれているが、所掌業務には具体的に、

- (1) 核データの評価及び評価済核データファイルの作成に関すること。
- (2) 炉定数の検討及び核データファイルの積分的検証に関すること。
- (3) 核燃料サイクルデータの評価及びこれに関すること。

と書かれている。まさに、「目的指向型」の現在のシグマ委員会活動を規定している。

「シグマ特別専門委員会」は、設置趣意書を目下搜索中であるが、専門委員会規程から判断して、「核データについての調査・研究・討議を行い、これが推進・普及を図るを目的」としていると推測される。この時の「核データ」は「特定の題目」であり、「シグマ研究委員会」と同様に、「シグマ特別専門委員会」は「目的指向型」の委員会である。従って、学会の「シグマ特別専門委員会」は原研の「シグマ研究委員会」の活動をオール・ジャパンに広げる役割を持っており、その結果、両委員会が表裏一体となった現在の「シグマ委員会」が運営されている。

「核データ部会」は「目的指向型」でなく、「核データ・核物理に関する専門分野の研究活動を支援し、その発展に貢献する」のであるから、当然、「核データファイルを目的」とした研究活動を行っている「目的指向型」の「シグマ委員会」の活動を支援する立場にある。即ち、「核データ部会」の設立は「シグマ特別専門委員会」および「シグマ研究委員会」の設置目的に影響を与えることはなく、「核データ部会」は「シグマ委員会」を積極的に支援することとなる。

5. おわりに

大学院生も含めた若い研究者を積極的に巻き込み、「核データ・核物理」の研究活動をもっと活性化したいと考えている。その結果、「シグマ委員会」の活性化にも貢献できればと考えている。そのために、本ニュースの読者の御支援をお願いいたします。

原子核データ（仮称）部会設立に関するアンケートの結果
（アンケート対象者：シグマ委員および JNDCmail 登録者）

回答者数：58名（回答率：約33%）

1. 原子核データ部会設立について、ご回答を下の(1)-(3)から一つ選択して下さい。

- (1) 賛成する：55名
- (2) 反対する：2名
- (3) 現時点では答えられない：1名

2. 1の質問に(2)あるいは(3)と御回答の方にお尋ねします。

御回答の理由を簡単に結構ですからお教え下さい。

- セクト化反対。
- シグマ特別専門委員会が解散するのかがどうかははっきりしないため。

3. 1の質問に(1)と御回答の方にお尋ねします。

3.1 部会設立の発起人に、

- (1) 加わっても良い：32名
- (2) 加わりたくない：7名
- (3) 現時点では答えられない：16名

3.2 部会が設立された場合、

- (1) 入会する：48名
- (2) 入会しない：0名
- (3) 現時点では答えられない：7名

3.3 部会名として、

- (1) 原子核データ部会：21名
- (2) 核データ部会：32名
- (3) 原子力データ部会，原子核物理・核データ部会，原子核基礎データ部会

4. その他、原子核データ部会設立に関して御意見がありましたらお教え下さい。

- 新しい体制に移行しても、部会の主要メンバーが旧い委員会の主要メンバーと変わらないのではないかと思うが、そうすると新しい体制に移るという意味がなくなる。新しい部会に新風を送り込むならば、部会設立は期待できるのだが・・・
- ある纏まったグループを部会とすることは意味がありますが、余り細分された部会設立には反対です。核データは炉物理、炉設計にとって非常に重要であり、炉物理部会で一緒に取り扱っていただきたい。

- 部会セッションをもうけて、面白いテーマを取り上げるなど、人を集める工夫が生まれることを期待します。
- 本来なら、核データ部会なるものを設立し、セクト化しない方が良いと思うのですが、止もう得ず賛同します。従って、部会は狭い核データのみにならねよう、配慮して下さい。
- 理学部物理（物理学会）に所属されている方で、核データ研究に興味のある方々にこの機会にぜひ入会／入部を進めて頂きたい。発起人にも物理関係者を加えることが望ましい。
- 部会の存在意義についてもっと議論を深めて行きたい。
- 早く作った方が良いのではと思います。
- 学会誌編集委員として任期はあと1年半ありますが、私のあとの編集委員をシグマ関係者から採用してもらうためにも、部会のサポートが必要かと思えます。
- 大強度陽子加速器施設の統合計画では、核データの声が小さくて、マイクロパルスを用いた核データ測定センターの構想は立ち消えになりました。シグマ委員会とその周りの測定グループの方々は、粘りが足りないというか、諦めが早すぎるように感じています。基礎物理分野の方々と交流し協力しあって行ったら良いように思います。
- 早急に設立することに賛同します。
- 部会の中では、「核データ評価・利用者の若返り」、「シグマ委員会の今後の在り方」等について議論する必要はありませんか？ 「核データ」「核エネルギー利用」に関する啓蒙活動のようなものを考えませんか？
- 部会設立はタイムリーであると思います。従来のWG中心 **productive** な活動形態と学会の普通の部会活動との分担を明確にして、データ整備活動に支障を来さないような適切な活動形態となりますようお願いします。
- 部会方式の長所、短所について議論する場があっても良いように思う。会員がいずれかの部会に属さねばとの理由が良くわからないが、設立されれば気軽に参加したい。
- 原子核データ部会設立の主旨は良く理解でき、是非設立する必要があると思います。
- 核データセンターとの関係をあらかじめ明確にしておくことが必要かとおもいます。
- 炉物理部会との連携を今後とも充実していくことが重要であると考えております。
- 従来、一部の方で顕著であった権威主義的態度及び対応をなくして行き、相互協力和和を重んじていただきたい。部会にするととなると多くの方々の協力が必要です。
- シグマ委員会との関係を明文化して、混乱が起きないようにして下さい。但し、連携は密接に！！